

同性からの呼ばれ方と性別による呼ぶ人と呼ばれる ことに対する感情，および関係親密さ認知との関連

和田 実・伊藤 晴香¹⁾

Abstract

The purpose of this study was to investigate the effects of forms of addressing from the same-sex persons and gender on feelings toward the addresser and the addressee, and the perception of interpersonal closeness. Forms of addressing were composed of four forms: to address him/her as Sir or Madam (e.g. Yamada-san: -san), to refer to him/her as Mr. or Ms. (e.g. Yamada-kun: -kun/-chan), to call him/her by name without any honorific title (e.g. Yamada: yobisute), and to call him/her by his/her nickname (e.g. Yama-cchi: nickname). Participants were 110 male and 122 female undergraduates. Each factor analysis of the feelings toward the addresser and the addressee revealed the same two factors: positive feelings and negative feelings. The females' positive feelings toward the addresser were higher than males'. The males' positive feelings toward the addresser of "-kun/-chan" and "nickname" were higher than "-san". The females' positive feelings toward the addresser of "-kun/-chan", "yobisute", and "nickname" were higher than "-san". Further those of "yobisute" and "nickname" were higher than "-kun/-chan". The negative feelings toward the addresser of "-san" were higher than "-kun/-chan" and "yobisute". The females' positive feelings toward the addressee were higher than males'. The positive feelings toward the addressee of "-kun/-chan", "yobisute", and "nickname" were higher than "-san". Further those of "yobisute" and "nickname" were higher than "-kun/-chan". The negative feelings toward the addressee of "-san" were higher than "-kun/-chan", "yobisute", and "nickname". The perception of interpersonal closeness of "-kun/-chan", "yobisute", and "nickname" was higher than "-san". Further, those of "yobisute" and "nickname" was higher than "-kun/-chan". These results revealed that the perception of interpersonal closeness varied according to the addressing.

問題と目的

他者をどのように呼ぶかは、呼ぶ人（話し手）が呼ばれる人（相手）との関係をどのように認識しているかが表れる。相手との心理的な距離が呼び方の違いによって表現される

1) 本研究は、第二著者の伊藤晴香さん（平成 29 年度名城大学人間学部卒業）の卒業論文のデータの一部を再分析してまとめたものである。

のである（もちろん、姓名と関係のない「課長」、「部長」などの地位や「お母さん」、「お父さん」、「先生」などの役割を表す言葉を用いることもある）。例えば、田中（1999）は、大学生の呼び方について、場面（友人・知人、教員、職場）、上下関係、性別を組み合わせた16場面について、どのように呼ばれるかを12の呼び方について、「普段そう呼ばれている」場合は選択肢に○を、「時々そう呼ばれる」場合は△を付ける方法を用いて調べている（無印は「その呼び方が使われない」と判断）。その結果、場面によって、より用いられる呼び方とそうでない呼び方があることを明らかにしている。そこで、本研究では、場面（状況）を限定し、個人的な関係が反映されるであろう「同学年の同性」からの様々な呼ばれ方について調べる。

まず、クラス内での呼び方と対人関係について調べた研究をみておこう。中條・滝浪（1989）は、小学生と中学生を対象に、ソシオメトリックテストを含む調査を行い、呼び方と集団内の人間関係を調べている。その結果、「くん」付けで呼ばれる男子は学級内で一目置かれていること、「さん」付けで呼ばれる女子は担当教師から「しっかりしている」という評価がなされることを明らかにしている。また、三島（2003）は、小学生を対象とした呼ばれ方と児童の相対的な強さおよび集団内外の呼ばれ方について調べている。結果によると、①男子児童の場合、「くん」付けで呼ばれる児童の方が「呼び捨て」や「あだ名」で呼ばれる児童に比べて学級内における相対的な強さが一般的に強い、②女子児童の場合、「ちゃん」付け、「あだ名」で呼ばれる児童に比べ、「さん」付けで呼ばれる児童の方が学級内における相対的な強さが一般的に弱い、という。

次に、呼ばれ方と感情の関連を調べた研究をみておこう。淡野・前田（2007）は、大学生のニックネームに対する感情を調べている。回答者が呼ばれたことのある呼び方に対して3件法（嬉しい、どちらでもない、嬉しくない）で回答を求めている。その結果、名前をもじったニックネーム、名前に「ちゃん」を付けたニックネーム、名前に「くん」や「さん」を付けたニックネームは、有名人に関連するニックネームと比べて嬉しいと感じること、また、名前に「ちゃん」を付けたニックネームは容姿に関するニックネームよりも嬉しいと感じることを明らかにしている。また、吉田（1992）は、小学生を対象に呼び方と対人感情について検討している。対人感情として「休み時間や放課後、一緒に遊びたい人」（接触欲求）と「逆らうと恐い人」（恐れ）を取り上げている。結果によると、女兒同士の場合、「一緒に遊びたい人」として選択した者は選択しなかった者に比べ、「姓+さん」で呼ぶ率が低く、姓や名を変形ないし、省略して呼ぶ率が高かった（この点に関し、男児には顕著な関連が見られなかった）。また、男児の場合、「逆らうと恐い人」として選択した率は「くん」付けまたは「さん」付けが高かった（女兒の場合、「逆らうと恐い人」として選択されたケースが少なかったので検討していない）。

さらに、野中・井上（2011）は、大学生を対象に、男女別のニックネームの種類と感情との関連を調べている。用いた12種類のニックネームは、名字のみの変形、名前のみの変形、名字と名前の変形、「ちゃん」付け、「くん」・「さん」付け、身体的特徴を踏まえたもの、部活動での役職、出身地を踏まえたもの、似ている有名人を踏まえたもの、性格的特徴、衣服等の装いの特徴を踏まえたもの、行動エピソードを踏まえたもの、であった。

評定に用いた感情は、基本感情の6種類（喜び、恐れ、嫌悪、怒り、悲しみ、驚き）であった。その結果、①親しい同性友人からニックネームで呼ばれることに喜びが知覚されやすい、②男性では嫌悪と怒りが同時に読み取られるものが存在するのに対し、女性では嫌悪と驚きが同時に読み取られるものが存在する（つまり、呼ばれる時のニックネームに対する基本感情の知覚に男女で差異がある）、③恐れや悲しみのようなネガティブな感情はあまり知覚されない、ことを明らかにしている。また、クラスター分析の結果、男性のニックネームは、調査対象者の「特性」、「姓名」、「外見的特徴」に由来するのに対し、女性のニックネームは、調査対象者の「姓名」、「対外的な特徴」、「特性」に由来することを明らかにしている。そして、姓名に関する呼び方に対しては喜び、性格的特徴や行動エピソードに関する呼び方に対しては男性で嫌悪と怒り、女性で嫌悪を感じることも明らかにしている。

以上のように、呼び方には相手に対する感情、相手との関係が表れていると言える。そこで、本研究では、ある特定の呼び方で呼ばれることに対し、その呼び方で呼ぶ人についてどう感じるか（その呼び方で呼ぶ人に対する感情）、その呼び方で呼ばれることを自身がどのように感じるか（その呼び方で呼ばれることに対する感情）、およびその相手との関係親密さの認知を調べる。この際、呼び手と呼ばれ手の関係を一定にするために、呼び手と呼ばれ手の関係を「同学年の同性」と限定する。また、上述した先行研究から性差が存在することが明らかになっているので、同時に性差も検討する。本研究では、先行研究をもとに、呼ばれ方として4つの条件を設定した。それらは、「さん」付け、「くん（回答者が男性の場合）／ちゃん（回答者が女性の場合）」付け、「呼び捨て」、「ニックネーム」である。

方 法

1. 調査対象者

調査対象者は名古屋市市内にある私立大学の学生239名（男性115名、女性123名、その他1名）であった。回答者のうち、調査項目に記入漏れがあった者、明らかに偏った回答と判断された者、および性別を「その他」と回答した者を除いた。したがって、232名が有効回答者となった（男性110名、女性122名、平均年齢（標準偏差）：男性19.55（1.35）、女性19.47（1.02））。調査は、2017年10月～11月にかけて実施された。

2. 手続き

調査は大学の講義時間内に集団で実施し、その場で回収した。また、一部の学生（約60名）は、キャンパス内で、直接、調査用紙を配布し、その場で実施、回収した。講義での調査実施の回収には男女比に偏りがみられたので、偏りがなくなるようにするためであった。

調査用紙には、(1) 調査への協力は強制ではなく、個人の自由意思に基づくこと、(2) 回答しないことで不利益を被ることはないこと、(3) 調査への協力に同意した場合でも、

いつでも辞退が可能であること、(4) 得られた回答は研究のみに用い、個人情報、プライバシーの保護に万全を尽くすこと、の4点を記載した。また、実施時には、上記の4点を口頭でも説明し、同意が得られた者のみを調査対象とした。

3. 質問紙の構成

本研究では、呼ばれ方として4つの条件を設定した。それらは、「さん」づけ、「くん（回答者が男性の場合）／ちゃん（回答者が女性の場合）」づけ、「呼び捨て」、「ニックネーム」であった。本研究は、呼ばれ方の違いによる感情および関係の親密さとの関連を検討することが目的であるため、呼ばれ方を参加者内要因とすると意識的に回答に差をつける可能性がある。また、質問項目が多くなるので回答者の負担も大きくなる。そこで、それらを避けるために、呼ばれ方を参加者間要因として質問紙を作成した。分析対象となった条件ごとの内訳を表1に示した。条件間の性の偏りはなかった ($\chi^2(3)=0.91, ns$)。

表1 4つの呼ばれ方、性、実際にその呼び方で呼ぶ人の有無別の調査対象者内訳（人）

	男 性				女 性			
	いる	いない	?	計	いる	いない	?	計
さん	9	13	5	27	12	10	7	29
君／ちゃん	16	12	1	29	25	2	1	28
呼び捨て	23	2	0	25	26	4	4	34
ニックネーム	19	8	2	29	19	8	4	31

注) N=232

?は「いるかどうか分からない」を表す。

質問紙は以下の5つからなる。

(1) 個人的背景要因

学部、学科、学年、年齢、性別をたずねた。性別は、「1. 男性、2. 女性、3. その他」から選んでもらった。これらの項目は、フェースシートの部分に置かれた。

(2) 条件操作

上述したように、呼ばれ方として4つの条件を設定した。質問紙では、まず、「初対面ではない同学年の同性から、“姓や名をもじらずに「さん」付けで”（この部分が条件ごとの呼ばれ方にかわる。すなわち、“姓や名をもじらずに、あなたが男性であれば「くん」、女性であれば「ちゃん」付けで”、“呼び捨て”で”、“ニックネーム”で”となる）呼ばれること」を想起してもらった。また、回答者によって各呼ばれ方の想起が異ならないようにするため、呼ばれ方ごとに例を記載した。「さん」付けの場合は、「例えば姓名が山田花子（女性）である場合、“山田さん”、“花子さん”となります」,「くん／ちゃん」付けの場合は、「例えば姓名が山田太郎（男性）である場合、“山田くん”、“太郎くん”となります」,「呼び捨て」の場合は、「例えば姓名が山田太郎（男性）である場合、“山田”、“太郎”となります」,「ニックネーム」の場合は、「例えば姓名が山田花子（女性）である場合、“やまちゃん”、“はなっち”などとなります」と記した。

さらに、自分に割り振られた条件の呼ばれ方で呼ぶ人が実際にいるかどうかを「いる、いない、いるかどうか分からない」で尋ねた。各回答者数の内訳を表1に示した。

(3) その呼び方で呼ぶ人に対する感情

斎藤 (1985) が用いた情緒項目のうち、「相手の人に感じる情緒」項目を用いた (表2)。これは、「愛情」、「なじみ」、「気がね」、「嫌悪」などの23項目からなる。教示は、「初対面ではない同学年の同性から姓や名をもじらずに、各条件の呼び方で回答者のことを呼ぶ人に対してどう感じるか」であった。回答は、「7:かなり感じる, 6:感じる, 5:やや感じる, 4:どちらともいえない, 3:あまり感じない, 2:感じない, 1:全く感じない」の7件法であった。

(4) その呼び方で呼ばれることに対する感情

斎藤 (1985) が用いた情緒項目のうち、「自分が感じる情緒」項目を用いた (表3)。これは、「さびしさ」、「悲しみ」、「喜び」、「不満」などの15項目からなる。教示は、「初対面ではない同学年の同性から、各条件の呼び方で呼ばれることについてどう感じるか」であった。回答は、「7:かなり感じる, 6:感じる, 5:やや感じる, 4:どちらともいえない, 3:あまり感じない, 2:感じない, 1:全く感じない」の7件法であった。

表2 その呼び方で呼ぶ人に対する感情の因子分析結果

	I	II
恐怖	.83	.03
憎悪	.81	.11
失望	.81	-.07
嫌悪	.79	-.03
嫉妬	.77	-.03
屈辱感	.76	.03
気味悪さ	.73	-.10
劣等感	.73	.12
かわいそう	.73	-.01
軽蔑	.73	-.04
けむたさ	.72	.05
怒り	.70	.01
気がね	.33	.23
愛情	-.10	.79
感謝	.06	.77
好意	-.26	.76
なじみ	-.25	.74
かわいい	.02	.67
甘え	.23	.66
気安さ	-.09	.56
優越感	.33	.49
うらやましき	.30	.46
敬意	.14	.27
因子間相関		-.07
α	.94	.87

表3 その呼び方で呼ばれることに対する感情の因子分析結果

	I	II
くやしき	.87	.07
不安	.87	-.03
苦悩	.86	-.01
イライラ	.85	.05
不満	.84	-.07
絶望	.82	.03
悲しみ	.81	-.05
さびしさ	.70	-.10
驚き	.65	.00
恥ずかしさ	.63	.16
満足感	.03	.91
うれしさ	-.00	.90
喜び	-.05	.90
安心	-.15	.79
誇り	.21	.73
因子間相関		-.20
α	.93	.92

(5) 関係親密さの認知

山中 (1994) の3つの観点を用いた。「好意度」(7:非常に好感が持てる～1:全く好感が持てない),「関係関与度」(7:非常に関わりがある～1:全く関わりがない),「関係のラベリング」(7:非常に親しい～1:全く親しくない)の3つの項目をSD法で評定してもらった。なお,山中 (1994) の関係のラベリングは,「1:顔や名前を知っている程度の友人,3:会えば話をする程度の友人,5:ある程度親しい友人,7:最も親しい友人」として尋ねている(2,4,6は無記載で実施)が本研究にあうように改変して用いた。指示は,「初対面ではない同学年の同性から,“姓や名をもじらずに‘さん付け’で”(この部分が条件によって,“姓や名をもじらずにあなたが男性であれば‘くん’,女性であれば‘ちゃん’付けで”,“姓や名をもじらずに‘呼び捨て’で”,“‘ニックネーム’で”,となる)あなたのことを呼ぶ人についてどう思いますか」として行った。

なお,他にその呼び方で呼ぶ人についての否定的感情(12項目)も尋ねているが,本論文では用いなかった。呼ばれ方ごとに,その呼び方で呼ばれることに対する感情尺度とその呼び方で呼ぶ人に対する否定的感情尺度の提示順序を入れ替えた8種類の質問紙を作成し,回答順による影響を相殺した。

結 果

1. 尺度の構成

(1) その呼び方で呼ぶ人に対する感情

因子分析(主因子法)を行ったところ,固有値の減衰状況は,7.85, 4.63, 1.28, 1.04, ……であり,2因子構造をなしていると考えた。プロマックス回転後の結果を表2に示した。第Ⅰ因子は,恐怖,失望などに負荷が高く,ネガティブ感情を表すと考えられる。そこで,ネガティブ感情因子と命名した。第Ⅱ因子は,愛情,感謝などに負荷が高く,ポジティブ感情を表すと考えられる。そこで,ポジティブ感情因子と命名した。

尺度構成にあたっては,因子負荷量が絶対値.40以上の項目を選んだ。したがって,ネガティブ感情12項目,ポジティブ感情9項目からなる。得点が高いほど,その呼び方で呼ぶ人にネガティブないしはポジティブ感情をより抱いていることを表すように得点化し,項目の単純和を項目数で除したものを尺度得点とした。これらの尺度についてのChronbachの α 係数を表2に示した。いずれも高い値が得られた。

(2) その呼び方で呼ばれることに対する感情

因子分析(主因子法)を行ったところ,固有値の減衰状況は,6.97, 3.61, 0.93, 0.54, ……であり,2因子構造をなしていると考えた。プロマックス回転後の結果を表3に示した。第Ⅰ因子は,くやしき,不満などに負荷が高く,ネガティブ感情を表すと考えられる。そこで,ネガティブ感情因子と命名した。第Ⅱ因子は,満足感,うれしさなどに負荷が高く,ポジティブ感情を表すと考えられる。よって,ポジティブ感情因子と命名した。

尺度構成にあたっては、因子負荷量が絶対値 .40 より小さい項目はいずれの因子にもなかったため、すべての項目を用いた。したがって、ネガティブ感情 10 項目、ポジティブ感情 5 項目からなる。得点が高いほど、その呼ばれ方にネガティブないしはポジティブ感情をより抱いていることを表すように得点化し、項目の単純和を項目数で除したものを尺度得点とした。これらの尺度についての *Chronbach* の α 係数を表 3 に示した。いずれも高い値が得られている。

(3) 関係親密さの認知

3 つの項目間の相関が高かった（好意度と関係関与度： $r=.70$ ，好意度と関係のラベリング： $r=.74$ ，関係関与度と関係のラベリング： $r=.84$ ，いずれも $p<.001$ ）ので、1 つの尺度としてまとめた。得点が高いほど、関係を親密と認知していることを表すように得点化し、項目の単純和を項目数で除したものを尺度得点とした。この尺度の *Chronbach* の α 係数は .91 と高い値が得られた。

2. 呼ばれ方と性別によるその呼び方で呼ぶ人に対する感情⁽¹⁾

呼ばれ方と性別によるその呼び方で呼ぶ人に対する感情との関連を明らかにするために、ポジティブ感情とネガティブ感情に対して、呼ばれ方（4） $\times$ 性（2）の分散分析を行った。いずれも参加者間要因である。

ポジティブ感情 呼ばれ方 ($F(3,222)=25.06$, $p<.001$) と性 ($F(1,222)=3.99$, $p<.05$) の主効果、および交互作用 ($F(3,222)=3.48$, $p<.05$) が有意であった（図 1）。交互作用について多重比較 (*Bonferroni* 法。以下同様) を行ったところ、「呼び捨て」($p<.01$) と「ニック

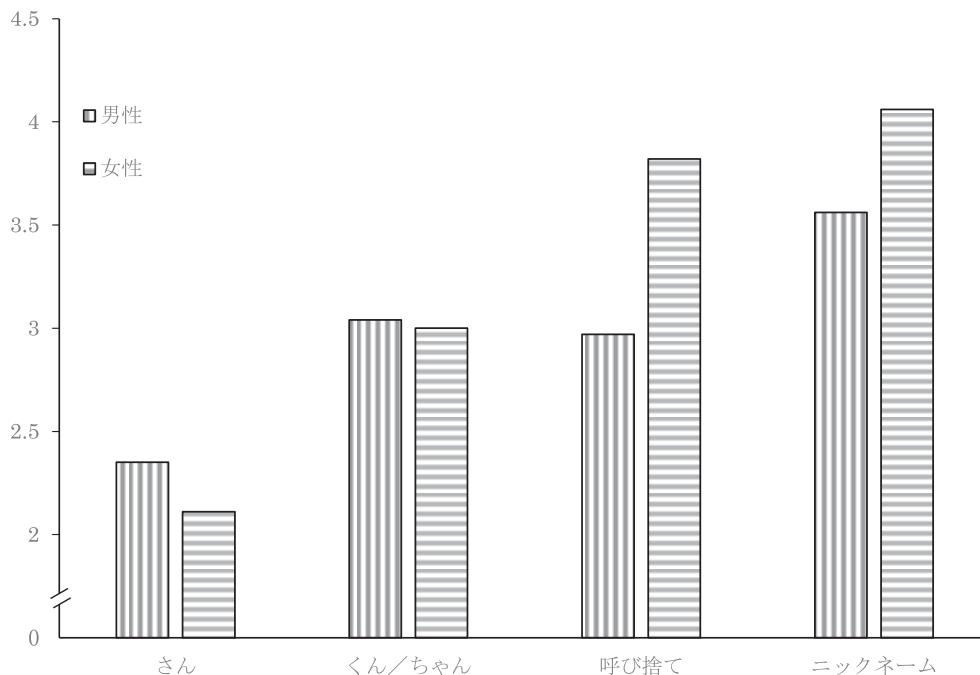


図 1 呼ばれ方と性別によるその呼び方で呼ぶ人に対するポジティブ感情

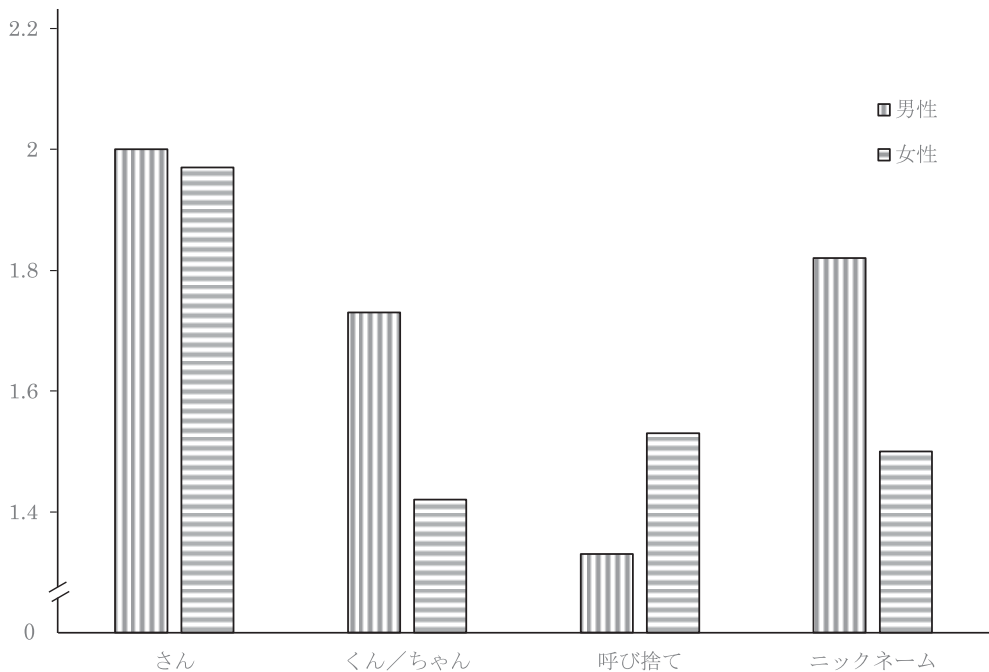


図2 呼ばれ方と性別によるその呼び方で呼ぶ人に対するネガティブ感情

クネーム」($p<.10$)は男性より女性の方が得点が高かった。また、男性は「さん」付けよりも「くん/ちゃん」付け($p<.10$)と「ニックネーム」($p<.001$)の方が得点が高く、女性は「さん」付けよりも「くん/ちゃん」付け($p<.01$)、「呼び捨て」($p<.001$)、および「ニックネーム」($p<.001$)の方が、さらに「くん/ちゃん」付けよりも「呼び捨て」($p<.05$)と「ニックネーム」($p<.001$)の方が得点が高かった。

ネガティブ感情 呼ばれ方の主効果が有意であった($F(3,221)=3.94$, $p<.01$)。多重比較を行ったところ、「さん」付けは「くん/ちゃん」付け($p<.10$)と「呼び捨て」($p<.01$)よりも得点が高かった(図2)。

3. 呼ばれ方と性別によるその呼び方で呼ばれることに対する感情

呼ばれ方と性別によるその呼び方で呼ばれることに対する感情との関連を明らかにするために、ポジティブ感情とネガティブ感情に対して、呼ばれ方(4)×性(2)の分散分析を行った。いずれも参加者間要因である。

ポジティブ感情 呼ばれ方($F(3,223)=22.71$, $p<.001$)と性($F(1,223)=4.77$, $p<.05$)の主効果が有意であった(図3)。呼ばれ方について多重比較を行ったところ、「さん」付けよりも「くん/ちゃん」付け($p<.01$)、「呼び捨て」($p<.001$)、および「ニックネーム」($p<.001$)の方が、さらに「くん/ちゃん」付けよりも「呼び捨て」($p<.05$)と「ニックネーム」($p<.001$)の方が得点が高かった。性の有意な主効果は、男性より女性の方が得点が高いことを示している。

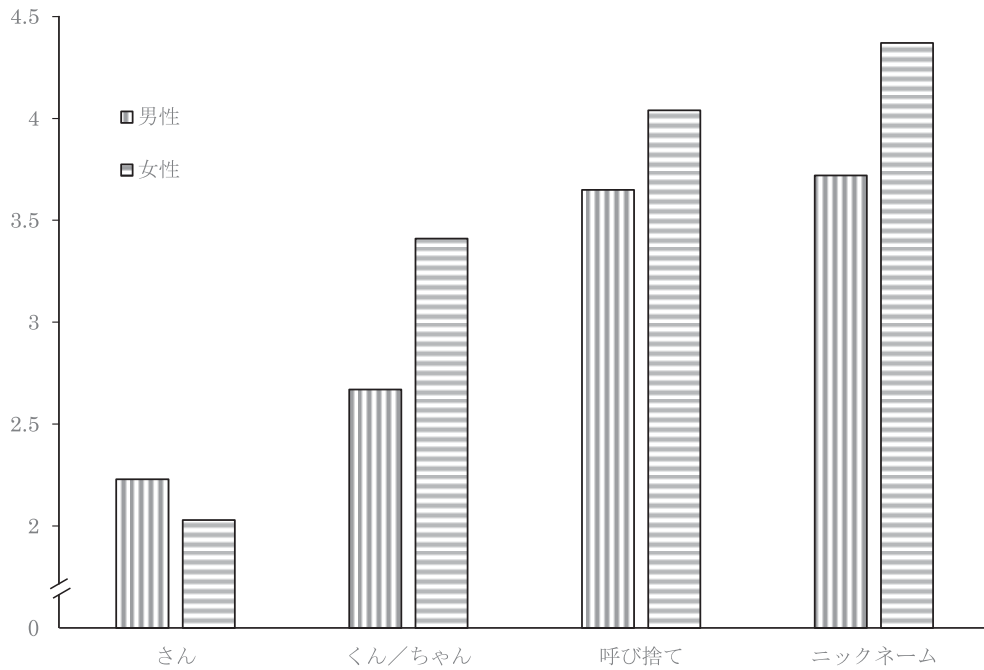


図3 呼ばれ方と性別によるその呼び方で呼ばれることに対するポジティブ感情

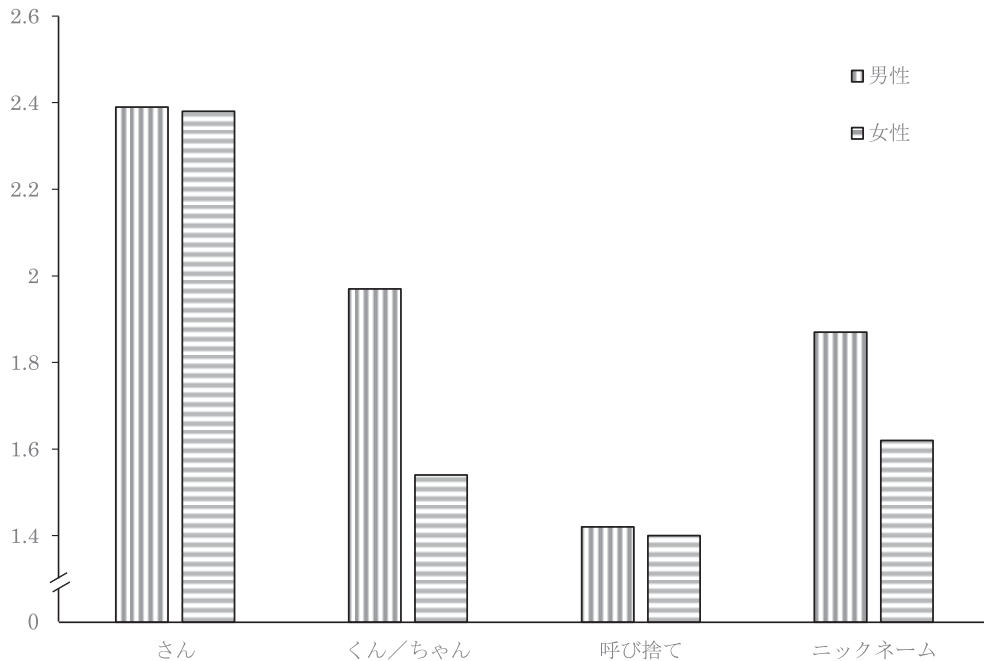


図4 呼ばれ方と性別によるその呼び方で呼ばれることに対するネガティブ感情

ネガティブ感情 呼ばれ方の主効果が有意であった ($F(3,222)=9.38, p<.001$)。多重比較を行ったところ、「さん」付けは「くん/ちゃん」付け ($p<.01$), 「呼び捨て」 ($p<.001$), および「ニックネーム」 ($p<.001$) よりも得点が高かった (図4)。

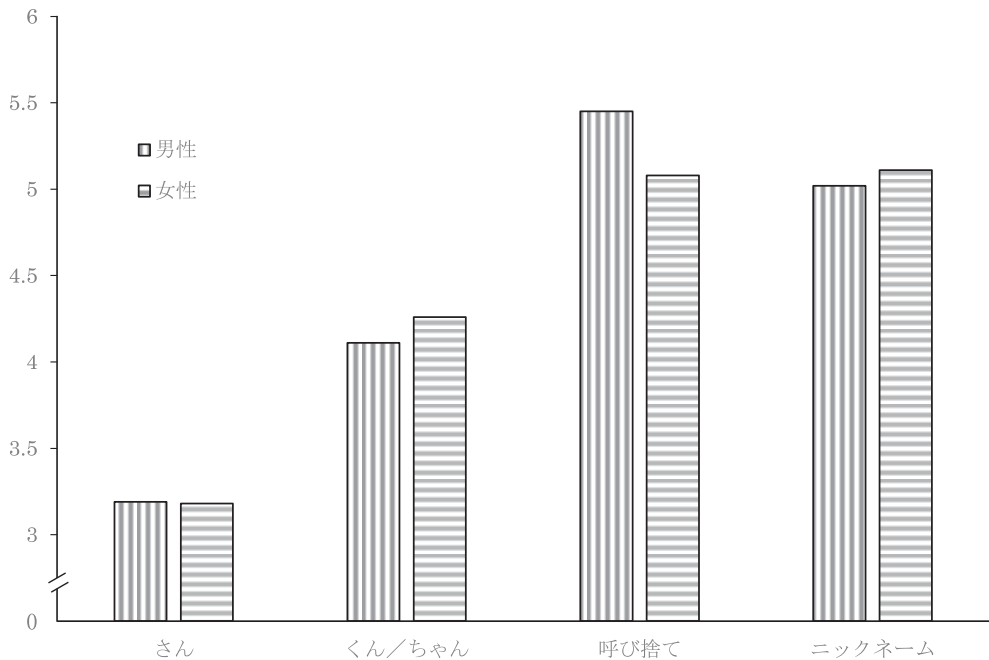


図5 呼ばれ方と性別による関係親密さの認知

4. 呼ばれ方と性別による関係親密さの認知

呼ばれ方と性別による関係親密さの認知との関連を明らかにするために、関係親密さの認知に対して、呼ばれ方(4)×性(2)の分散分析を行った。いずれも参加者間要因である。

呼ばれ方の主効果が有意であった($F(3,224)=51.50, p<.001$)。多重比較を行ったところ、「さん」付けよりも「くん/ちゃん」付け、「呼び捨て」、および「ニックネーム」(いずれも $p<.001$)の方が、さらに「くん/ちゃん」付けよりも「呼び捨て」($p<.001$)と「ニックネーム」($p<.01$)の方が得点が高かった(図5)。すなわち、「さん」付けと「くん/ちゃん」付けは、他の2つの呼ばれ方よりも、関係親密度の認知が低いのである。

5. 呼ばれ方と性別によるその呼び方で呼ぶ人と呼ばれることに対する感情、および関係親密さの認知間の関連

呼ばれ方ごとに男女別のその呼び方で呼ぶ人に対する感情と呼ばれ方に対する感情、および関係親密さの認知間の相関を算出した(表4～7)。

さん付け 男性は呼ぶ人に対する感情と呼ばれ方に対する感情のポジティブ同士、ネガティブ同士の間に有意な正の相関が得られた。一方、いずれのポジティブ感情とネガティブ感情も関係親密さの認知とは明確な関係が得られなかった(いずれのポジティブ感情も有意な傾向の相関は得られているが)。さらに、呼ぶ人に対する感情のポジティブとネガティブの間に有意な正の相関が得られた。すなわち、「さん」付けで呼ぶ相手にポジティブ感情を抱いている者ほど、ネガティブ感情も抱いている。

女性は呼ぶ人に対する感情と呼ばれ方に対する感情のポジティブ同士、ネガティブ同士

表4 「さん付け」の男女別の感情および関係親密さの認知間の相関 (男性\女性)

	1.	2.	3.	4.	5.
呼ぶ人に対する感情					
ポジティブ (1)		.05	.77***	-.05	.54**
ネガティブ (2)	.40*		.03	.85***	-.49**
呼ばれ方に対する感情					
ポジティブ (3)	.88***	.31		.11	.47**
ネガティブ (4)	.15	.83***	.22		-.53**
関係親密さの認知 (5)	.37†	-.20	.33†	-.31	

注) † $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表5 「くん/ちゃん付け」の男女別の感情および関係親密さの認知間の相関 (男性\女性)

	1.	2.	3.	4.	5.
呼ぶ人に対する感情					
ポジティブ (1)		-.20	.75***	-.16	.37*
ネガティブ (2)	.36†		.07	.78***	-.45*
呼ばれ方に対する感情					
ポジティブ (3)	.51**	-.08		-.06	.47*
ネガティブ (4)	.29	.75***	.07		-.43*
関係親密さの認知 (5)	.43*	-.20	.44*	-.20	

注) † $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表6 「呼び捨て」の男女別の感情および関係親密さの認知間の相関 (男性\女性)

	1.	2.	3.	4.	5.
呼ぶ人に対する感情					
ポジティブ (1)		-.38*	.81***	-.25	.51**
ネガティブ (2)	.26		-.21	.76***	-.38*
呼ばれ方に対する感情					
ポジティブ (3)	.80***	-.03		-.20	.58***
ネガティブ (4)	.26	.89***	-.08		-.50**
関係親密さの認知 (5)	.21	-.62***	.34†	-.50*	

注) † $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表7 「ニックネーム」の男女別の感情および関係親密さの認知間の相関 (男性\女性)

	1.	2.	3.	4.	5.
呼ぶ人に対する感情					
ポジティブ (1)		-.18	.81***	-.11	.27
ネガティブ (2)	.17		-.18	.91***	-.29
呼ばれ方に対する感情					
ポジティブ (3)	.57***	-.01		-.25	.43*
ネガティブ (4)	.02	.71***	-.01		-.32†
関係親密さの認知 (5)	.01	-.42*	.07	-.49**	

注) † $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

の間に有意な正の相関が得られた。また、いずれのポジティブ感情とも関係親密さの認知とは有意な正の相関、ネガティブ感情とは有意な負の相関が得られた。すなわち、ポジティブ感情を抱いている者ほど関係を親密と認知しており、ネガティブ感情を抱いている者ほど関係を親密と認知していない。

くん／ちゃん 男性は呼ぶ人に対する感情と呼ばれ方に対する感情のポジティブ同士、ネガティブ同士の間に有意な正の相関が得られた。また、いずれのポジティブ感情も関係親密さの認知との間に有意な正の相関が得られたが、ネガティブ感情と関係親密さの認知との間には有意な相関関係が得られなかった。さらに、呼ぶ人に対する感情のポジティブとネガティブの間に有意な傾向の正の相関が得られた。すなわち、「くん／ちゃん付け」で呼ぶ相手にポジティブ感情を抱いている者ほど、ネガティブ感情も抱いている。

女性は呼ぶ人に対する感情と呼ばれ方に対する感情のポジティブ同士、ネガティブ同士の間に有意な正の相関が得られた。また、いずれのポジティブ感情も関係親密さの認知とは有意な正の相関、いずれのネガティブ感情とは有意な負の相関が得られた。すなわち、ポジティブ感情を抱いている者ほど関係を親密と認知しており、ネガティブ感情を抱いている者ほど関係を親密と認知していない。

呼び捨て 男性は呼ぶ人に対する感情と呼ばれ方に対する感情のポジティブ同士、ネガティブ同士の間に有意な正の相関が得られた。また、いずれのネガティブ感情も関係親密さの認知との間に有意な負の相関が得られたが、ポジティブ感情と関係親密さの認知とは有意な相関関係が得られなかった（呼ばれ方に対する感情は有意な傾向）。

女性は呼ぶ人に対する感情と呼ばれ方に対する感情のポジティブ同士、ネガティブ同士の間に有意な正の相関が得られた。また、いずれのポジティブ感情も関係親密さの認知とは有意な正の相関、ネガティブ感情とは有意な負の相関が得られた。すなわち、ポジティブ感情を抱いている者ほど関係を親密と認知しており、ネガティブ感情を抱いている者ほど関係を親密と認知していない。さらに、呼ぶ人に対するポジティブ感情とネガティブ感情の間に有意な負の相関が得られた。すなわち、ポジティブ感情を抱く相手にはネガティブ感情を抱いていない。

ニックネーム 男性は呼ぶ人に対する感情と呼ばれ方に対する感情のポジティブ同士、ネガティブ同士の間に有意な正の相関が得られた。また、いずれのネガティブ感情も関係親密さの認知との間に有意な負の相関が得られたが、いずれのポジティブ感情も関係親密さの認知との間には何ら相関関係は得られなかった。

女性は呼ぶ人に対する感情と呼ばれ方に対する感情のポジティブ同士、ネガティブ同士の間に有意な正の相関が得られた。また、呼ばれ方に対するポジティブ感情のみが関係親密さの認知と有意な正の相関関係にあった（呼ばれ方に対するネガティブ感情とは有意な傾向）。すなわち、呼ばれ方にポジティブ感情を抱いている者ほど関係を親密と認知している。

考 察

1. 呼ばれ方と性別によるその呼び方で呼ぶ人および呼ばれることに対する感情

ある特定の呼び方で呼ぶ人に対する感情およびその呼び方で呼ばれることに対する感情は、呼ばれ方によって異なった。また、性差も一部見出された。以下では、感情ごとに考察する。

ポジティブ感情 呼ぶ人に対するポジティブ感情は、男性では「さん」付けよりも「くん／ちゃん」付けと「ニックネーム」の方が、女性では「さん」付けよりも「くん／ちゃん」付け、「呼び捨て」、および「ニックネーム」の方が、さらに「くん／ちゃん」付けよりも「呼び捨て」と「ニックネーム」の方がより抱いていた。呼ばれ方に対するポジティブ感情は、「さん」付けよりも「くん／ちゃん」付け、「呼び捨て」、および「ニックネーム」の方が、さらに「くん／ちゃん」付けよりも「呼び捨て」と「ニックネーム」の方がより抱いていた。

以上のように、いずれのポジティブ感情も、「さん」付けがもっとも低く、「呼び捨て」と「ニックネーム」が高かった。野中・井上（2011）は、親しい同性友人からニックネームで呼ばれることに喜びが知覚されやすいことを見出しており、同じ結果と言えよう。また、本研究結果から、「呼び捨て」や「ニックネーム」は、呼ばれることだけでなく、呼ぶ人にもポジティブ感情を抱えていることが明らかとなった。

さらに、性差がみられた。呼ぶ人に対するポジティブ感情では、「呼び捨て」と「ニックネーム」で男性より女性の方が、また呼ばれ方に対する感情では、呼ばれ方に関わらず男性より女性の方がよりポジティブ感情を抱いていた。ネガティブ情動ではあるが、Dosser, Balswick, & Halverson（1983）が悲しみの経験や表出は男性より女性に多いことを見出しているように、男性は素直に情動を表出できないからであろう。

ネガティブ感情 呼ぶ人に対するネガティブ感情は、「くん／ちゃん」付けと「呼び捨て」よりも「さん」付けの方がより抱いていた。呼ばれ方に対するネガティブ感情は、「くん／ちゃん」付け、「呼び捨て」、および「ニックネーム」よりも「さん」付けの方がより抱いていた。

いずれのネガティブ感情も、「さん」付けがもっとも高く、「呼び捨て」がもっとも低かった。三島（2003）は、①男子児童の場合、「くん」付けで呼ばれる児童の方が「呼び捨て」や「あだ名」で呼ばれる児童に比べて学級内における相対的な強さが一般的に強いこと、②女子児童の場合、「ちゃん」付け、「あだ名」で呼ばれる児童に比べ、「さん」付けで呼ばれる児童の方が学級内における相対的な強さが一般的に弱いことを見出している。男女児で方向は異なるが、男女いずれも「さん」付けに対しては、親密さが低く、距離感を持っているということであろう。よって、ネガティブ感情が高いという本研究結果と一致すると言えよう。また、男児の場合だけであったが、吉田（1992）は、「逆らうと怖い人」として選択した率は「くん」付けまたは「さん」付けが高いことを報告している。「さん」付けはいずれのネガティブ感情も高いという本研究結果と一致していると言えよう。

2. 呼ばれ方と性別による関係親密さの認知

性差は見出されず、「くん／ちゃん」付け、「呼び捨て」、および「ニックネーム」は「さん」付けよりも、さらに「呼び捨て」と「ニックネーム」は「くん／ちゃん」付けよりも関係を親密とみていた。すなわち、「さん」付けと「くん／ちゃん」付けは、他の2つの呼ばれ方よりも、親密でないと認知されていたのである。本研究の「さん」付けは、ポジティブ感情が低く、ネガティブ感情が高いという結果と一貫していると言えよう。また、女兒同士の場合のみであるが、吉田（1992）は、「一緒に遊びたい人」として選択した者は「姓＋さん」で呼ぶ率が低く、姓や名を変形ないし、省略して呼ぶ率が高いことを見出しており、同じ結果と言えよう。

3. 呼ばれ方と性別によるその呼び方で呼ぶ人と呼ばれることに対する感情、および関係親密さの認知間の関連

呼ばれ方、性別にかかわらず、呼ぶ人に対してポジティブ感情（ネガティブ感情）を抱いている者ほど、その呼ばれ方にポジティブ感情（ネガティブ感情）を抱いていた（その呼ばれ方にポジティブ感情（ネガティブ感情）を抱いている者ほど、呼ぶ人に対してポジティブ感情（ネガティブ感情）を抱いていた）。すなわち、呼ばれ方にかかわらず、その呼び方で呼ぶ人に対する感情とその呼ばれ方で呼ばれることに対する感情が一貫しているということである。言い換えると、好意的な人からの呼ばれ方は好意的に受け取り、非好意的な人からの呼ばれ方は非好意的に受け取るのである。認知の一貫性が成立しており、妥当な結果であろう。

また、女性は、その呼び方で呼ぶ人に対する感情もその呼び方で呼ばれることに対する感情も、ポジティブ感情を抱いている者ほど関係を親密と認知しており、ネガティブ感情を抱いている者ほど関係を親密と認知していなかった（関係を親密と認知している者ほど、その呼び方で呼ぶ人に対する感情もその呼び方で呼ばれることに対する感情も、ポジティブ感情をより抱き、ネガティブ感情をより抱いていなかった）。妥当な結果と言えよう。

男性は、呼ばれ方によって関連のあり方が異なった。「さん」付けでは、いずれのポジティブ感情とネガティブ感情も関係親密さの認知とは明確な関係が得られなかった（ポジティブ感情はいずれも有意な正の有意傾向の相関は得られているが）。「さん」付けで関連がみられなかったのは、様々な要因が入り込んだためであろう。すなわち、一般的に、同年代では「さん」付けで呼ぶのは女性であり、男性においてはほとんど用いられない。同年代の男性を「さん」付けで呼ぶのは、尊敬、敬意などを表すときや、逆に嫌みや距離感（親しみにくさ）を表すときであろう。よって、「さん」付けには、ポジティブ感情、ネガティブ感情ともに、関係親密さの認知とは一義的に関連しなかったのであろう。

「くん／ちゃん」付けはいずれの感情もポジティブのみ、「呼び捨て」と「ニックネーム」はいずれの感情もネガティブのみが関係の親密さ認知と関連した。「くん／ちゃん」付けは、ネガティブ感情が高いのでネガティブ感情では関連がみられにくく、ポジティブ感情のみが関連し、「呼び捨て」と「ニックネーム」は、そもそもポジティブ感情が高いのでポジティブ感情では関連がみられにくく、ネガティブ感情のみが関連したということもあろう。

さらに、男性の「さん」付けと「くん／ちゃん」付けでは、これらの呼び方で呼ぶ人にポジティブ感情を抱いている者ほど、ネガティブ感情も抱いていた。一般的に、同年代では「さん」付けで呼ぶのは女性であり、男性においてはほとんど用いられない。よって、「さん」付けには、尊敬だけでなく、嫌みや距離感（親しみにくさ）を表すことがあり、ポジティブ感情とネガティブ感情の両方を同時に抱くのであろう。男性の「さん」付けは、いずれのポジティブ感情とネガティブ感情ともに関係の親密さ認知と関連しなかった結果と通じるものがあるだろう。男性の呼ばれ方に対するポジティブ感情のみであるが、「くん／ちゃん」付けも「呼び捨て」と「ニックネーム」よりも低くなっている。よって、「さん」付けと同様に「くん」付けも両価的な意味合いを持つのかも知れない。

また、女性の「呼び捨て」では、呼ぶ人にポジティブ感情を抱くほど、呼ぶ人にはネガティブ感情を抱かなかった。女性は「呼び捨て」で呼んでくる人には、両価的な感情は抱かないということである。よって、女性の「呼び捨て」は、本当に親しい人同士の間でしか使わないということかも知れない。すなわち、女性は decoding に優れるので、互いにもどう思っているのか（互いの関係）を誤ることなく把握できる。そこで、「呼び捨て」は本当に親しい人同士でしか使われず、ポジティブ感情とネガティブ感情が一義的に関係しているのであろう。さらなる検討が必要である。

最後に本研究の問題点と今後の課題をあげておこう。まず、本研究の問題点である。ある特定の呼び方で呼ぶ人に対する感情とその呼び方で呼ばれることに対する感情ともに、7件法の中立点である4点を超えている指標はわずかであり、感情項目を検討し直す必要があろう。また、本研究の「ニックネーム」は、例として、「例えば姓名が山田花子（女性）である場合、“やまちゃん”、“はなっち”などとなります」と一般化して答えるように質問紙に記載したが、実際に呼ばれているニックネームを思い浮かべて答えた人もいるだろう。「ニックネーム」は、本人が気にしている身体的特徴で呼ばれる、すなわち、望んでいないニックネームで呼ばれている者もいるだろう。既に報告した淡野・前田（2007）は、名前に「ちゃん」を付けたニックネームは容姿に関するニックネームよりも嬉しいと感じることを、野中・井上（2011）は、性格的特徴や行動エピソードに関する呼ばれ方に対しては男性で嫌悪と怒り、女性で嫌悪を感じることを明らかにしている。これらは、容姿、性格特徴、行動エピソードに関するニックネームの内容を分けておらず、言って欲しくない容姿、性格特徴、行動エピソードが呼ばれ方に用いられているからであろう。本研究でも、そういう人たちが含まれているとしたら、評定に異なる方向の影響を与えていたであろう。ニックネームを分類するなどしてたずねる必要があるだろう。

次に、今後の課題である。まず、本研究は呼ぶ人と呼ばれる人の関係を「同学年の同性」としたが、両者の関係を変えると、同じ呼ばれ方でも、感情や関係親密度の認知も異なるであろう。また、本研究は呼ばれ方を参加者間計画で行った。参加者内計画で行うと呼ばれ方間の差異がより顕著に表れるのだろうか。今後の課題である。

注

- (1) その呼ばれ方で実際に呼ぶ人がいる者のみでも分析を行ったが、全体での分析とほぼ同じであったので、全体での分析のみ記している。

引用文献

- Dosser, D. A., Balswick, J. O., & Halverson, C. F. (1983). Situational context of emotional expressiveness. *Journal of Counseling Psychology*, **30**, 375-387.
- 三島浩路 (2003). 学級内における児童の呼ばれ方と児童相互の関係に関する研究 教育心理学研究, **51**, 121-129.
- 中條修・滝浪常雄 (1989). 呼称に見られる対人関係の認識 静岡大学教育学部研究報告書 (人文・社会科学篇), **40**, 1-16.
- 野中陽一郎・井上弥 (2011). ニックネームの被呼称時に生起する感情に基づく分類 広島大学大学院教育学研究科紀要 (第一部), **60**, 31-36.
- 齋藤勇 (1985). 対人感情と情緒の人間関係的アプローチ 心理学研究, **56**, 222-228.
- 田中ゆかり (1999). 大学生の呼称一場面・上下・性の異なる相手からの呼ばれ方― 青山女子短期大学総合文化研究所年報, **7**, 105-120.
- 淡野将太・前田健一 (2007). 大学生とニックネーム―ニックネームの由来とニックネームに対する感情について― 広島大学心理学研究, **7**, 311-314.
- 山中一英 (1994). 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, **34**, 105-115.
- 吉田寿夫 (1992). 児童における呼称と対人感情 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 227.